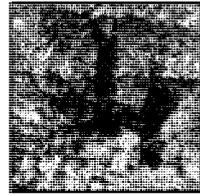


鶉ノ森遺跡

2005年 発掘調査の概要



2005

妻沼町遺跡調査会

序

妻沼町は、埼玉県のほぼ中央北部に位置し、北には雄大な利根川の水を湛え、その南の低地帯には長閑な田園風景が広がっています。この田園は、利根川の氾濫によってできた肥沃な土壌の賜物で、今日では、都心から70km圏という地の利を活かした野菜の特産地として知られています。

「聖天様」の名で町民に親しまれている歓喜院長楽寺は、平家物語などで知られる斉藤別当実盛によって創建されたと伝えられ、錫丈頭・聖天堂・貴惣門といった国重要文化財を含む多くの貴重な文化財を今に残します。

高度成長期、妻沼町には多くの工場が進出しました。今回発掘調査を行った鶉ノ森遺跡も、昭和49年から51年にかけて、日鉄カーテンオールの工場建設計画に伴い、埼玉県遺跡調査会により発掘調査が実施されています。前社の工場建設が断念され、今回の事業主の前身である日本メルク萬有(株)がこの地に進出する際も、妻沼町によって発掘調査が行われました。これらの調査で古墳跡や住居跡等多くの遺構等が検出され、大規模な集落遺跡の存在が明らかになりました。

さて、今回、萬有製薬株式会社の事業所拡張に伴う管理棟建設と駐車場整備に先立ち、妻沼町遺跡調査会が発掘調査をいたしました。その結果、この地域でも最大級の平安時代の住居跡や「山」字の墨書がある土師器など、貴重な遺構・遺物が多数発見され、従来から注目されている鶉ノ森遺跡の全容の一部が明らかとなりました。

本報告書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。本書が多くの出土遺物と共に、学術研究に、あるいは、社会教育に御活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査・整理作業に御尽力いただきました、埼玉県教育局生涯学習文化財課、埼玉県立埋蔵文化センター、熊谷市教育委員会、深谷市教育委員会、川本町教育委員会をはじめとする関係者の皆様の御協力、御理解に対し、心から御礼申し上げます。

平成17年9月

妻沼町遺跡調査会

会長 森 田 美 江

例 言

- 1 本書は、妻沼町遺跡調査会が実施した、萬有製菓株式会社の事業所拡張に伴う管理棟建設及び駐車場整備に先立ち実施された埼玉県大里郡妻沼町大字西城字甲鷓ノ森810外38に所在する鷓ノ森遺跡の発掘調査概報である。指示通知 教生文第2－32号
- 2 発掘調査は、平成17年6月24日から7月29日であり、整理期間は、平成17年8月8日から9月15日までである。
- 3 本書にかかる資料は、妻沼町教育委員会が保管する。
- 4 妻沼町遺跡調査会の組織は、以下のとおりである。
会 長 森田美江（妻沼町教育委員会 教育長）
理 事 神田一，大山雄三，坂上昭司，井上勲，江利川豊吉（妻沼町文化財保護審議会委員），
永津博恭（萬有製菓株式会社 運営部長）
監 事 荻原弘子（妻沼町出納室 室長），橋浦篤（萬有製菓株式会社 総務課長）
調 査 員 谷井彪（日本考古学協会 会員）
事務局長 中里高治（妻沼町教育委員会 教育次長）
事務局員 根岸洋子（妻沼町教育委員会主査），蛭間健悟（同主事），坂東隆秀（同社会教育指導員）
- 5 本書の編集は谷井彪が行い、執筆は文末に記した。
- 6 発掘調査参加者
新井良太，安藤達雄，岡村靖之，五味ノリ子，清水美紀，田代さち子，田中敦子，筑井房子，
中島清香，牧野薫，箕村仲治，宮崎安子，森スミ子
- 7 整理・図面作成参加者
安藤達雄，岡村靖之，清水美紀，田代さち子，中島清香，箕村仲治
- 8 本書の作成に当たり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。
熊谷市教育委員会、深谷市教育委員会、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、赤熊浩一、滝瀬芳之、
永井智教

目 次

序

例言

目次

I 発掘調査の概要	1
1 調査にいたる経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経緯	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 遺跡の概要	4
IV 主な遺構と遺物	6
まとめ	14

I 発掘調査の概要

1 調査にいたる経過

平成16年度、萬有製薬株式会社から妻沼町西城にある工場の拡張工事（管理棟新設・駐車場拡張）に際して、文化財の所在及びその扱いについて照会があった。

妻沼町教育委員会では、同地がNo.61-018（入胎・鵜ノ森遺跡）内に所在し、埋蔵文化財包蔵地内にあることから、範囲確認のための試掘調査が必要であると回答し、平成17年1月31日に事業主から試掘調査の依頼を受けた。

同遺跡は、昭和49年から51年にかけて埼玉県遺跡調査会が、昭和54年には町教委が発掘調査を行い、古墳跡や多くの遺構等が検出され、大規模な集落遺跡の存在が明らかになっている。

試掘調査は、町教委が2月9日、10日に東西2箇所で行い、いずれからも埋蔵文化財の所在が確認された。このうち東箇所については、駐車場予定地で盛土工法であることから発掘は免れたが、西箇所については、管理棟建設地の東端から遺構・遺物が確認されたため、管理棟建設予定地の東端部からその東側にかけて発掘調査を行うことで事業主と合意した。

その後、事業主と具体的な協議を重ね、発掘調査は5月下旬より開始することとなり、町教委では早急に発掘調査を実施するべく5月12日に妻沼町遺跡調査会を設立した。しかし、5月下旬、町担当者が急病で倒れ、町の埋蔵文化財担当者が不在となり、調査を延期せざるを得ない事態に陥った。再び事業主と協議を重ね、計画を一部変更し、前埼玉県立自然史博物館長の谷井彪氏を指導者として招聘し、6月24日より発掘調査を実施することとなった。

2 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査は、管理棟建設予定地の東端部からその東側にかけて実施した。調査は、平成17年6月24日から始まり、調査面積はおよそ432㎡であった。まず、重機により表土を掘削し、表土掘削終了後に発掘作業員を導入し、遺構の確認作業を経て、発掘・実測等を順次行った。梅雨の長雨や台風の通過、猛暑による日照り等の気象条件により困難を余儀なくされたが、7月29日には遺跡全体の撮影を終了し、器材の撤収を行い、現場における作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、8月8日より開始し、遺物の処理、図面の整理、写真撮影等を経て、報告書作成のための執筆・割付等の作業に入り、9月15日に終了した。（蛭間健悟）

II 遺跡の立地と環境

妻沼町は、埼玉県北端のほぼ中央部利根川によって形成された低地帯に位置し、その大部分は右岸にあり、小島地区のみ左岸の群馬県側に位置する。この隣接する群馬県とは、地理的には勿論、文化、社会、経済活動等、あらゆる面で密接な交流があり、近年、国道407号線によって流通活動は特に著しいものがある。

地形的に見ると、妻沼低地の呼称にみられるように、かつて利根川、荒川の両河川及びその支流によって形成された自然堤防とその後背湿地からなる低地帯であり、現在、利根川の人口堤防を除き、西側の前新田付近で約32m、東側の日向新田付近で約24mであり、西から東に向かい、漸次、その高度を低くし、さらに加須低地へ移行している。さらに、詳細にみると、福川と奈良川との間に形成された微高地、芝川と福川との間の中間微高地及び、芝川と利根川の間に形成された北側の台地の三つに大別することができる。

北側の台地以外の微高地は孤立丘状として点在しており、現在では、集落や畑地となり、その間の後背湿地は水田として利用されている。もっとも、大河利根川の語源を探ると、「トネ」はアイヌの古語まで行きつき、「沼や湖のように広くて大きい河」を意味していると言われており、「水」に関する地形に由来する沼、池、江、井、瀬、島、谷戸といった地名が多く使われている。また、調査区の南側を流れる入胎川は、江袋沼を水源として西から東へ緩やかに蛇行し、福川に注ぎ、やがて利根川の本流へ進む小河川で、北岸に自然堤防が形成されている。

次に歴史的な背景を概観する。

現在、妻沼最古の遺物は、西城の切通遺跡から発見された縄文時代前期の関山式土器であるが、一片が採集されたのみである。この土器は発掘調査によるものではなく、偶然表面から採集されたものであり、詳細は明確でない。その後、数度の発掘調査が実施されているが、いまだに当該期の資料は確認されていない。中期になると、道ヶ戸条里遺跡から加曾利E式土器が数点確認されている。他にも散発的な出土があるが、事例は多くない。後期になるとその数は増加し、代表的なものとして前述の西城切通遺跡が挙げられ、加曾利B期や安行期の遺物が多く発見されている。

弥生時代については、飯塚地区に中期の遺跡が集中して発見されている。飯塚遺跡・飯塚南遺跡や埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって調査された飯塚北遺跡等がこれにあたり、さらに周辺に目を向けると、隣接する深谷市の上敷免遺跡や熊谷市の横間栗遺跡、池上遺跡等があり、埼玉県内の弥生時代中期を代表とする遺跡が集中する地域となっている。

古墳時代については、弥藤吾新田遺跡や鶴ノ森遺跡の今回調査された南側から前期五領期の住居跡が発見された。また、上江袋遺跡からも、残存状態は悪いものの一件の住居跡が発見されており、対岸の群馬県側に分布する石田式土器との関係が考慮されるものであるが、不明な部分が多く、さらなる調査を待たねばならない。古墳については、墳丘の残るものとして摩多利神社古墳があるが、明らかでない部分が多い。その他では、上江袋古墳群で4基の古墳跡が確認され、飯塚古墳群についても調査がされている。埴輪が散布する地域も多く、西城や江袋地域を中心に、相当数の古墳があったことが想定される。

奈良・平安時代の状況としては、現在調査した区域を含む入胎・鶴ノ森遺跡や飯塚遺跡のような大規模集落の存在が確認されている。この時代の末期になると、妻沼経塚遺跡や観音堂瓦窯跡等注目すべき遺跡が確認されている。妻沼経塚遺跡は、昭和32年の妻沼小学校校庭の拡張整備時4基の経塚が確認され、うち2基からは経筒が出土した。残された墨書痕「安」から「久安」（1140-50）の文字が想定されており、経筒を埋納した有力者として長井齊藤氏を考える説がある。齊藤別当実盛は、平安末期、長井荘

(妻沼町とその周辺地域)に赴任しており、治承3年(1179)にはこの遺跡の西に位置する聖天宮を改修・合祀したと伝えられている。観音堂瓦窯跡からは、12世紀後半の瓦が出土されている。癒着した瓦が多数出土する類例の少ない重要な遺構であり、美里町の水殿瓦窯(国史跡)とともにこの時代の埼玉県を代表する瓦窯跡であるが、その瓦の供給先については水殿瓦窯のように明確ではない。

鎌倉時代以降の遺跡としては、西城館遺跡や長安寺遺跡、東城館遺跡等があるが、不明な点が多いのが実状である。(坂東隆秀)



第1図 鶉ノ森遺跡周辺の遺跡分布図

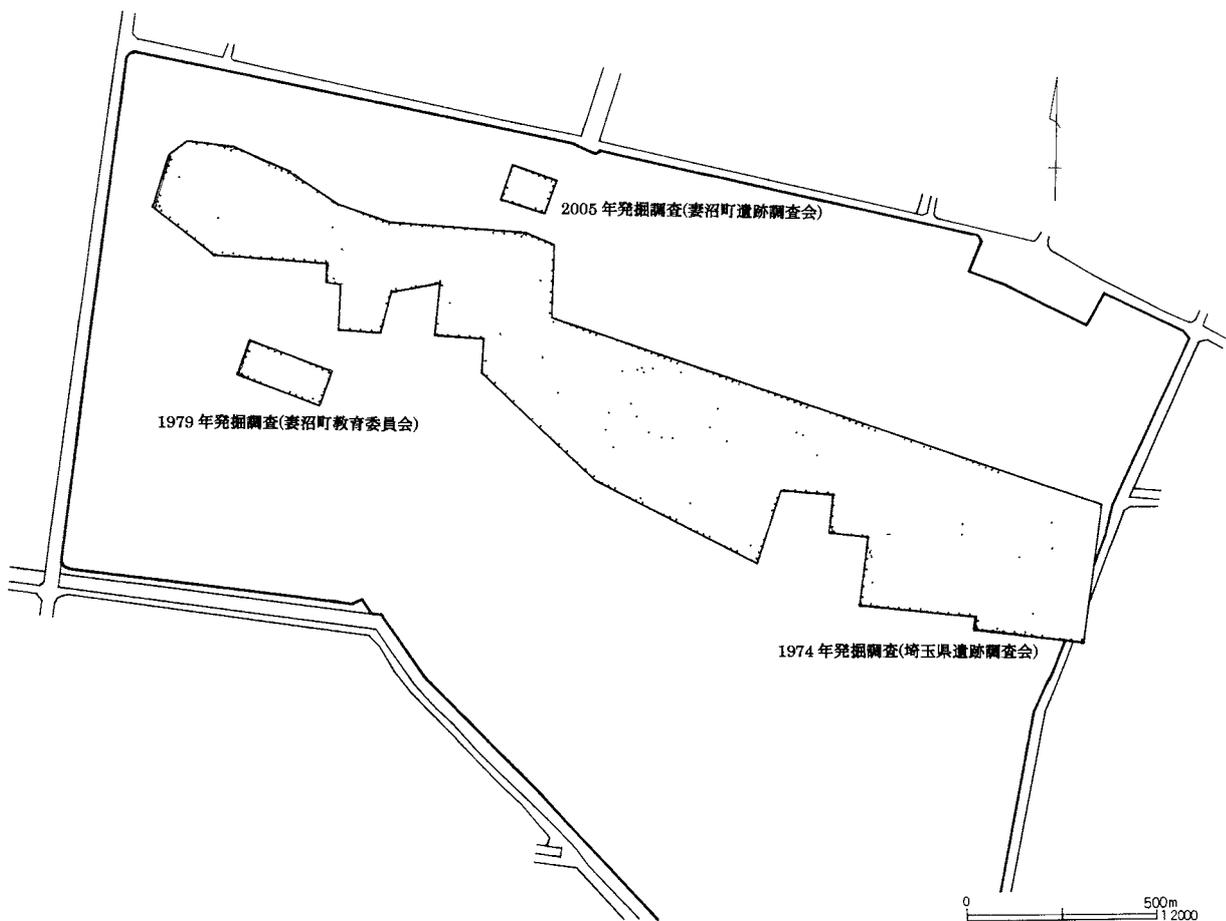
Ⅲ 遺跡の概要

鶉ノ遺跡は、埼玉県大里郡妻沼町大字西条字甲鶉ノ森に所在する。遺跡の北には福川が東西に流れ、南側は入胎川が流れ熊谷市と接する。遺跡の立地は、周囲が水田に囲まれているため、東西に長い、独立丘陵状の自然堤防に広がるように見える。

しかし、この地域は、瓦製造が盛んに行われた深谷市に隣接しており、粘土採集地であったため、表土層から地山となる黄褐色粘土層が採集されてきた。このため、表土層の下が直接地山である黄褐色粘土層となる場所も多い。また、出土遺物も粘土採集の際多量に出土しており、地元でよく知られた遺跡である。

正式な発掘調査は、昭和49年、日鉄カーテンオール(株)の工場建設のため、埼玉県遺跡調査会で実施された。調査範囲は東西では450m強で、独立丘状の地形全体に及んだ調査であった。古墳時代から平安時代に及ぶ集落跡のほか、古墳も発見されている。住居跡総数160軒とされており、相互が重なり合いながら発見されている。なお、社会的状況の変化で工場建設が中止となっていった。

しかし、昭和54年、新たに日本メルク萬有株式会社がこの地に進出することとなったため、妻沼町教育委員会が、未調査部分の調査を行っている。この際、古墳時代前期の住居跡1軒を含む古墳時代後期、奈良・平安時代の住居跡27軒が発見され、断絶はあるが、古墳時代の初期から奈良・平安時代に及ぶ長期間営まれた大規模の集落跡であることが判明した。



第2図 鶉ノ森遺跡年次別発掘調査図

今回の調査地は、従来調査地の北側、中央に近いところで、18×24mほどの長方形の範囲である。調査区全体に地山の黄褐色粘土層の上に黒褐色土が薄くあり、焼土、炭化物に混じって、須恵器、土師器の小破片が含まれていた。削平された住居跡も相当あったと考えられる。

調査に当たっては、重機で表土層および一部の黒褐色土を剥ぎ、地山の黄褐色粘土層を出すように努め、遺構確認を行った。地山は調査区全体ではほぼ水平であったが、南東の隅がやや低くなっていた。

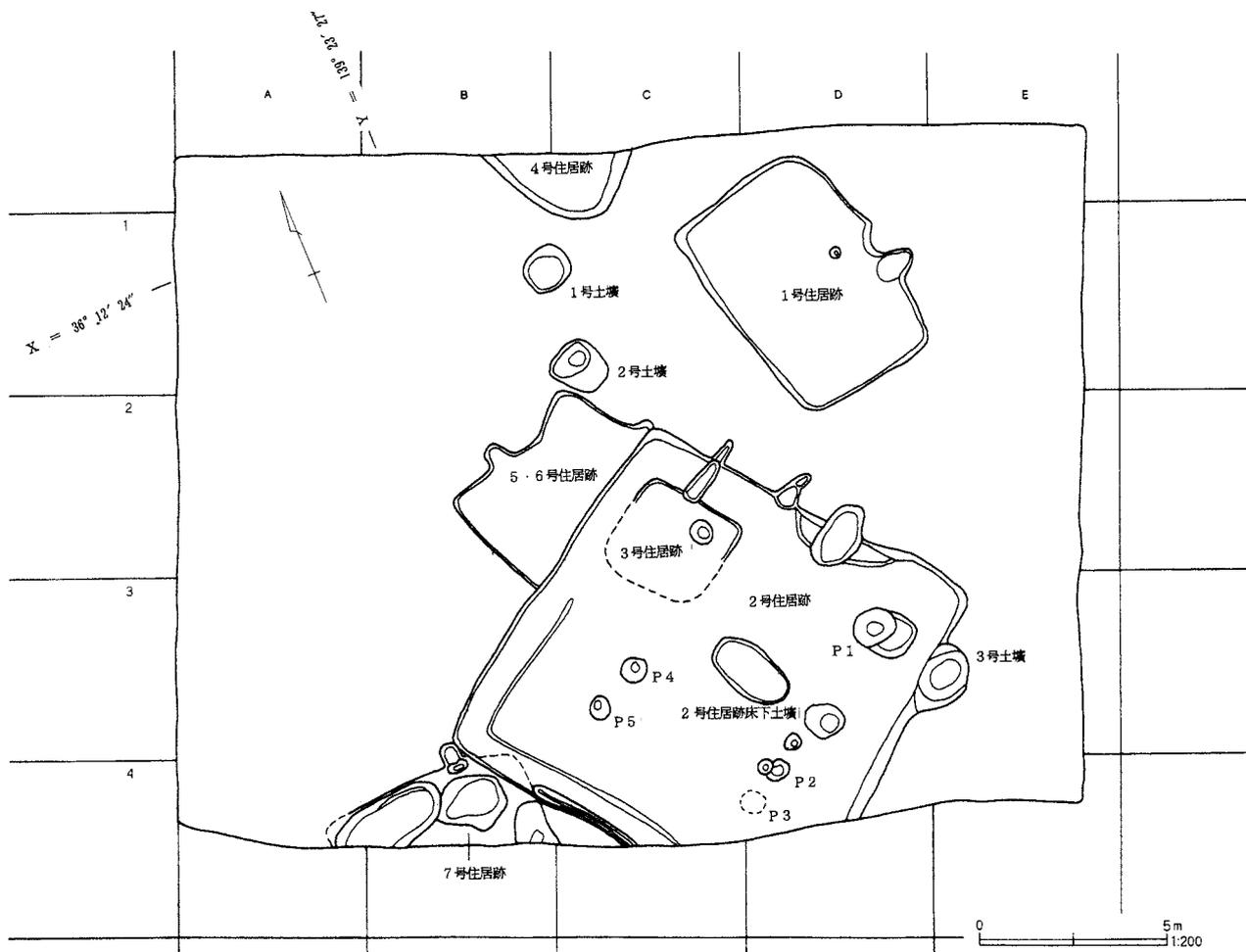
検出された遺構・遺物はすべて、奈良・平安時代のものであり、第1号の南壁で重なっていた一部風倒木でできた跡から7世紀代の土師器、須恵器が出土している。遺構の分布は調査区中央やや南に10mを越す大形住居跡が発見されたほか、これと重なって第3号、第5・6号、第7号の住居跡があった。また、北に第1号、調査区北壁で第4号住居跡が並ぶ。

第1号住居跡は、住居跡の確認段階で北半範囲が不明だったので、住居跡掘り下げと同時にプラン確認を行ったが、第1号住居跡の床面近くで北辺を確認、当初古い別遺構を切って作られたと思われた。しかし、確認のため北辺の壁際に沿って重機で確認したところ、途中に横倒しとなった地山が発見され、大型の風倒木跡と判明した。第4号住居跡から第1号住居跡北東隅までの大きな痕跡であった。

なお、第2号住居跡には4軒の住居跡が複合している。第3号住居跡は小形で、まるまる第2号住居跡内に造られたものである。カマド周辺のプランはほぼつかめたが、南半の正確なプランは把握できなかった。

第5・6号住居跡はカマドが北辺と西辺の2か所あり、プランがゆがむことから2軒の住居跡と考えられる。

第7号住居跡はうっすらプランが見えたと思われたが、最終的にはカマドと掘り方の存在で住居跡と推定した。土層の上からは前後関係がつかめなかった。(谷井彪)



第3図 蕪ノ森遺跡2005年発掘調査全体図

IV 主な遺構と遺物

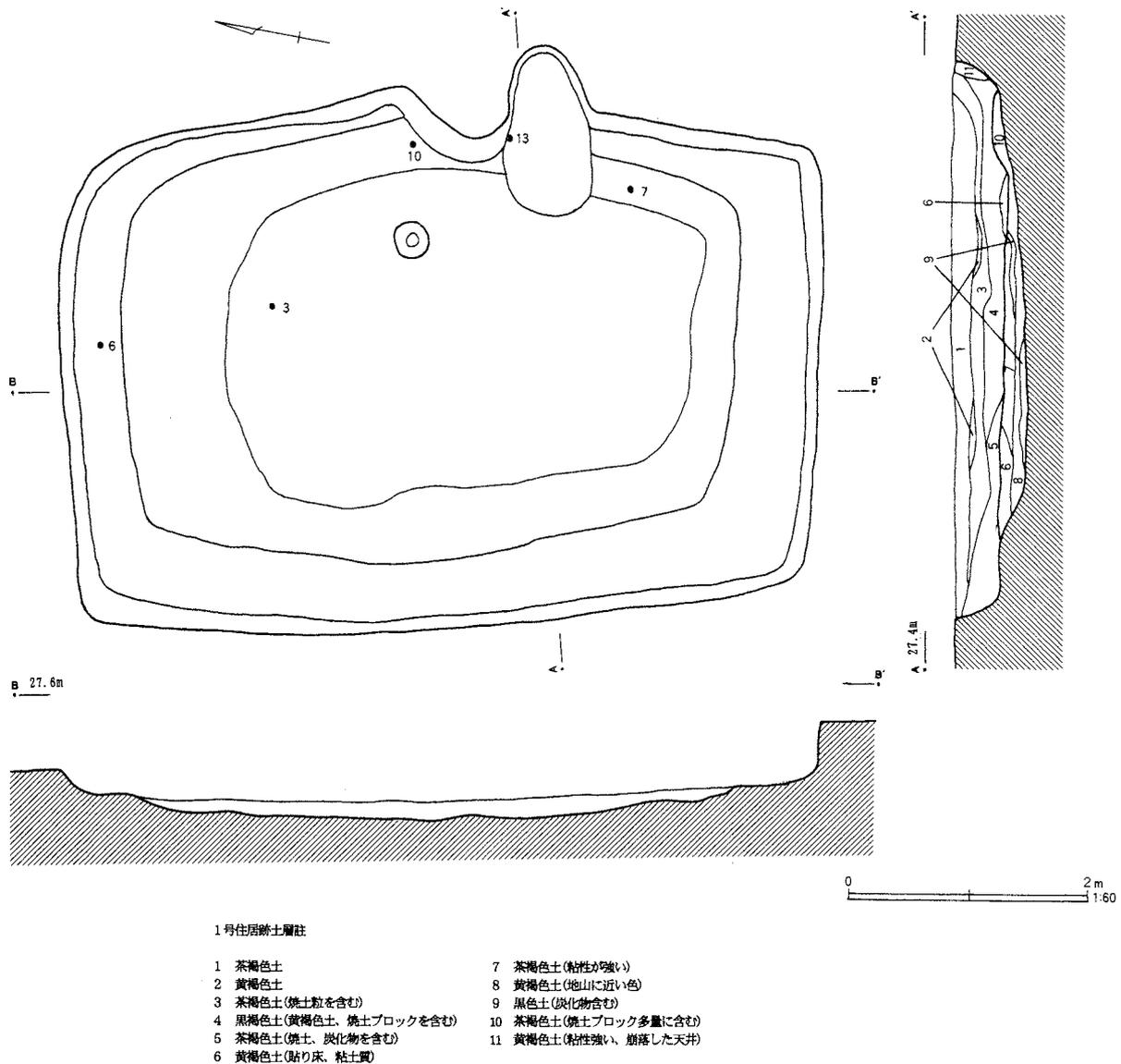
第1号住居跡

〈位置と概略〉 調査区の北東付近に位置している。

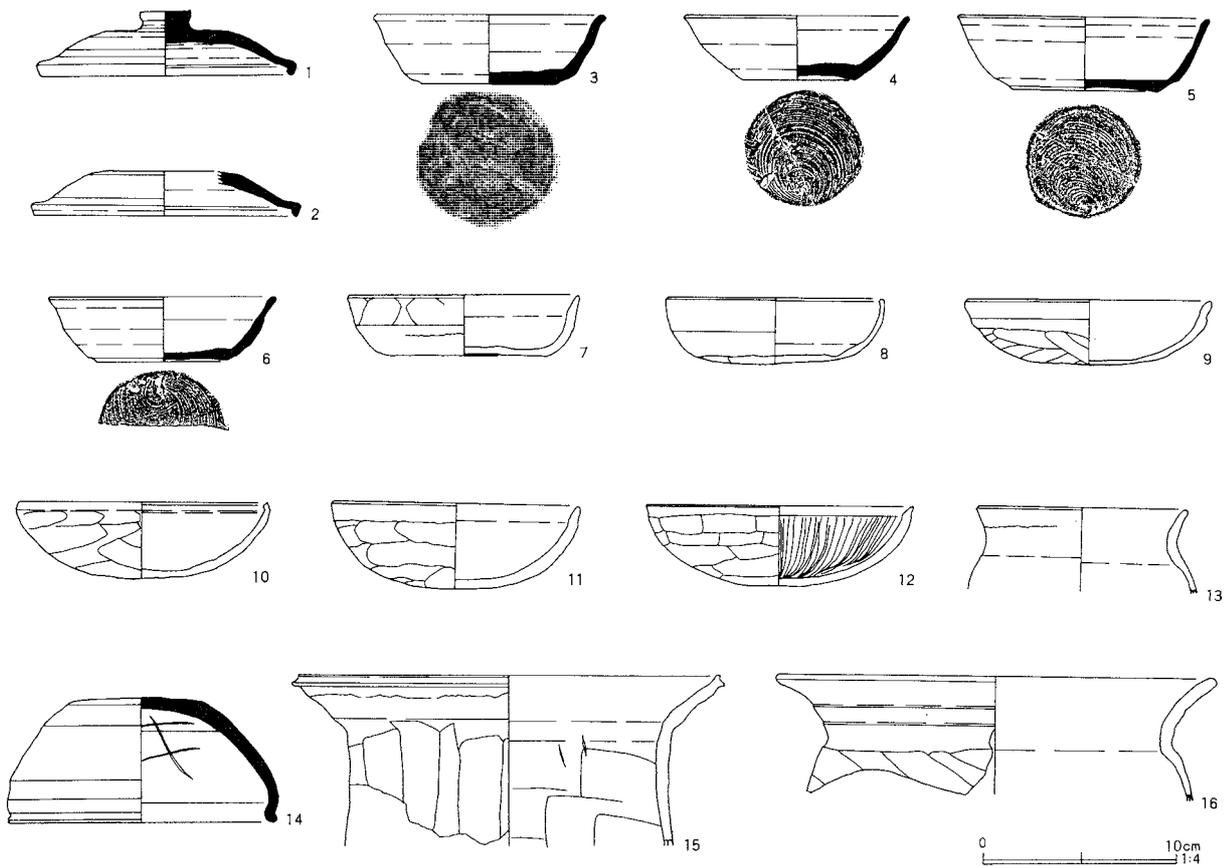
〈形態と規模〉 南北に長い概略5m×6.4mの長方形のプランで、確認面から深さ40cmである。カマドは東に設置されている。床面に薄い黒色土が覆い、貼り床となる。明確な柱穴は検出できなかった。

〈遺物の出土状況〉 覆土の上半は、土師器、須恵器の小破片がほとんどで、床面近くになって復元図の可能な土器の出土があった。住居跡の時期は、床面近くから出土した須恵器坏は、1個体底部周辺へら削りのものがあつたほか、糸切り離しのままのものであることから9世紀第2四半期から中頃となろう。なお、この住居跡は風倒木痕を切って造られており、7世紀中頃の須恵器蓋、土師器甕なども混入していた。

須恵器の特徴をみると、南比企産もみられるが、多くはやや黒ずんだ青灰色のもの、夾雑物の少ない灰白色のものがある。



第4図 第1号住居跡全測図



第5図 第1号住居跡出土遺物

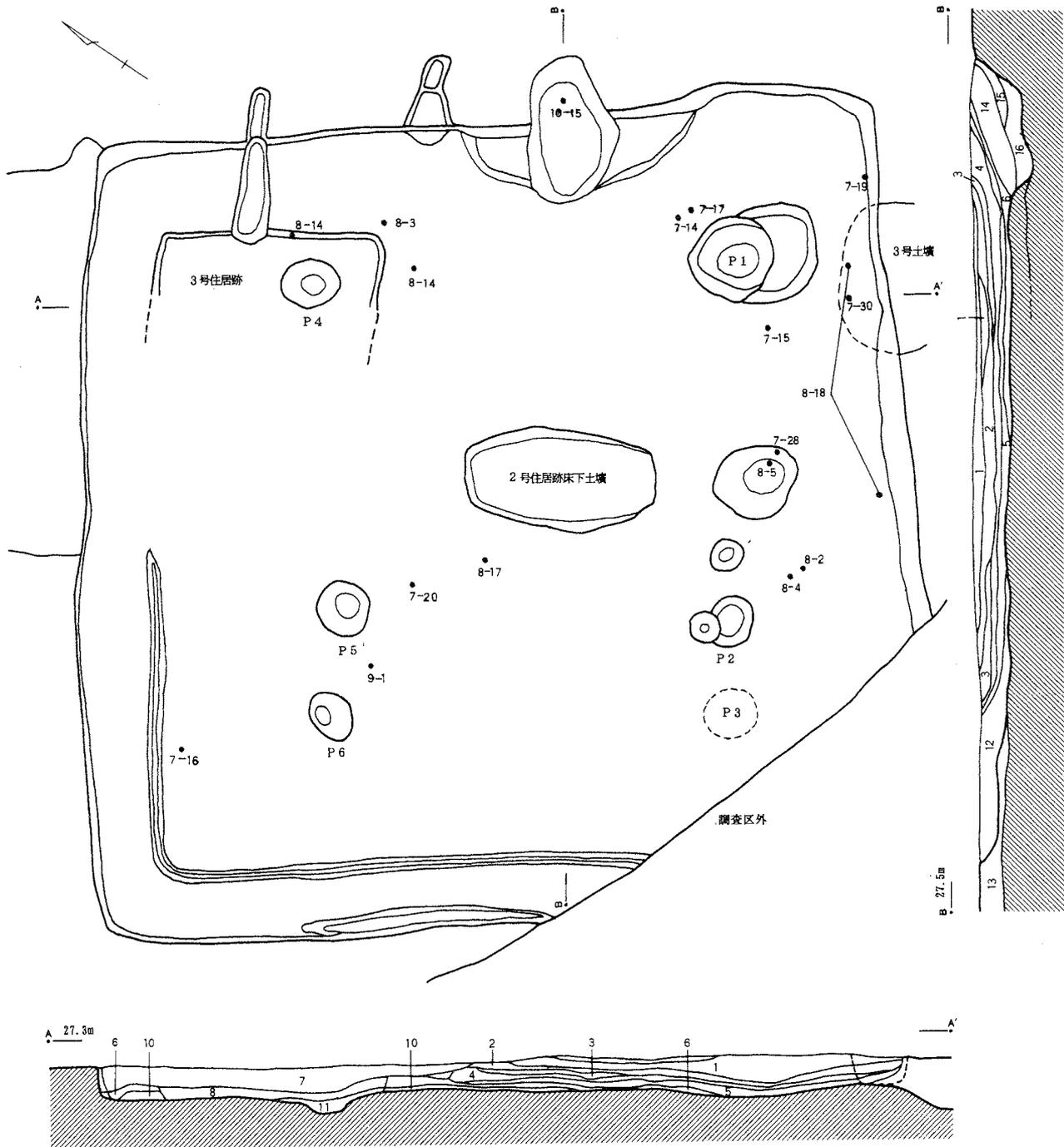
第2号住居跡

〈位置と概略〉 調査区の南に位置し、住居内の東壁で第3号、西壁で第5・6号住居跡と切り合っている。

〈形態と規模〉 10.4m×10.8mのほぼ正方形のプランである。確認面からの深さは40cmである。北西及び南西壁からほぼ1m内側に壁溝があり、一回り拡張していることがわかる。現カマドは北東壁で、旧カマドの南に位置している。柱穴は6本。南西壁側の2本が拡張後のものであろう。住居跡の中央、カマド前には長方形の床下土壌があった。貼り床下から検出された。第7図13の須恵器坏が出土。

〈遺物の出土状況〉 確認面から多量の遺物が出土した。覆土が黒色土と灰白色粘土の互層なことから黒色土中に多量の土師器、須恵器片が含まれていた。住居跡の時期は土師器甕が「コ」の字口縁直前であり、坏が扁平で、底部が丁寧なへら削りをしていることから8世紀第4四半期以前とできよう。ただし、やや大形で、底部が糸切り離しのままの坏が3個体存在する。胎土は灰青色で、粘土粒子の細かいものであった。粉っぽいことから埼玉以外で生産されたものであろう。時期を考える際検討を要する。また、近い胎土で、より硬質に焼き上がった箱形の坏もある。前内出窯の製品に似るが、底部整形手法や胎土も異なる坏が2点出土している。いずれも複数の出土であり、共伴関係を否定する材料はない。また、体部下端へら削りの坏もある。なお、ループの暗文や内黒の土師器坏もあり、遺跡の交流関係を知る材料となる。

「山」と書かれた墨書土器2点の他、族、鎌、鍵穴などの鉄製品が出土した。

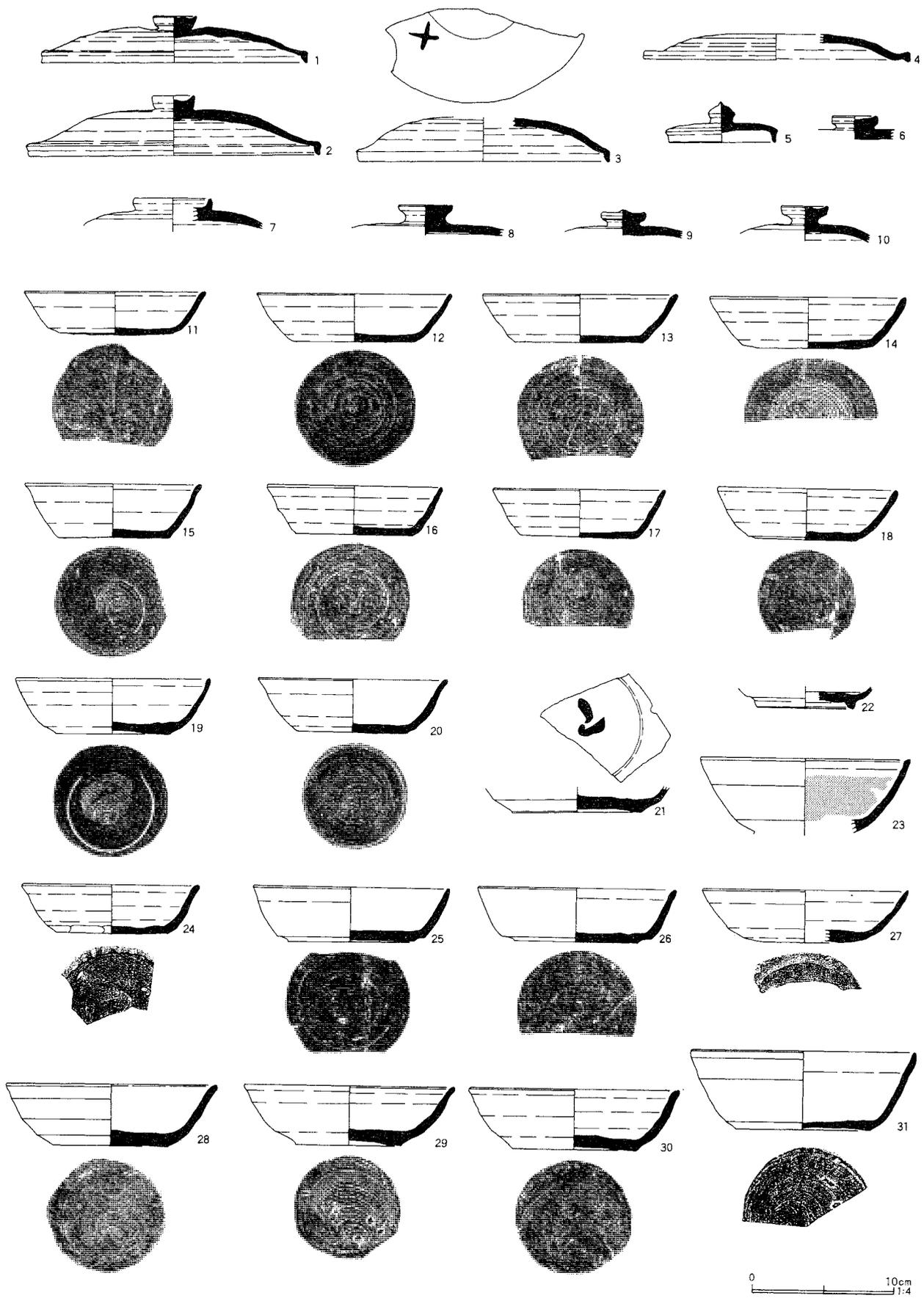


2号住居跡土層註

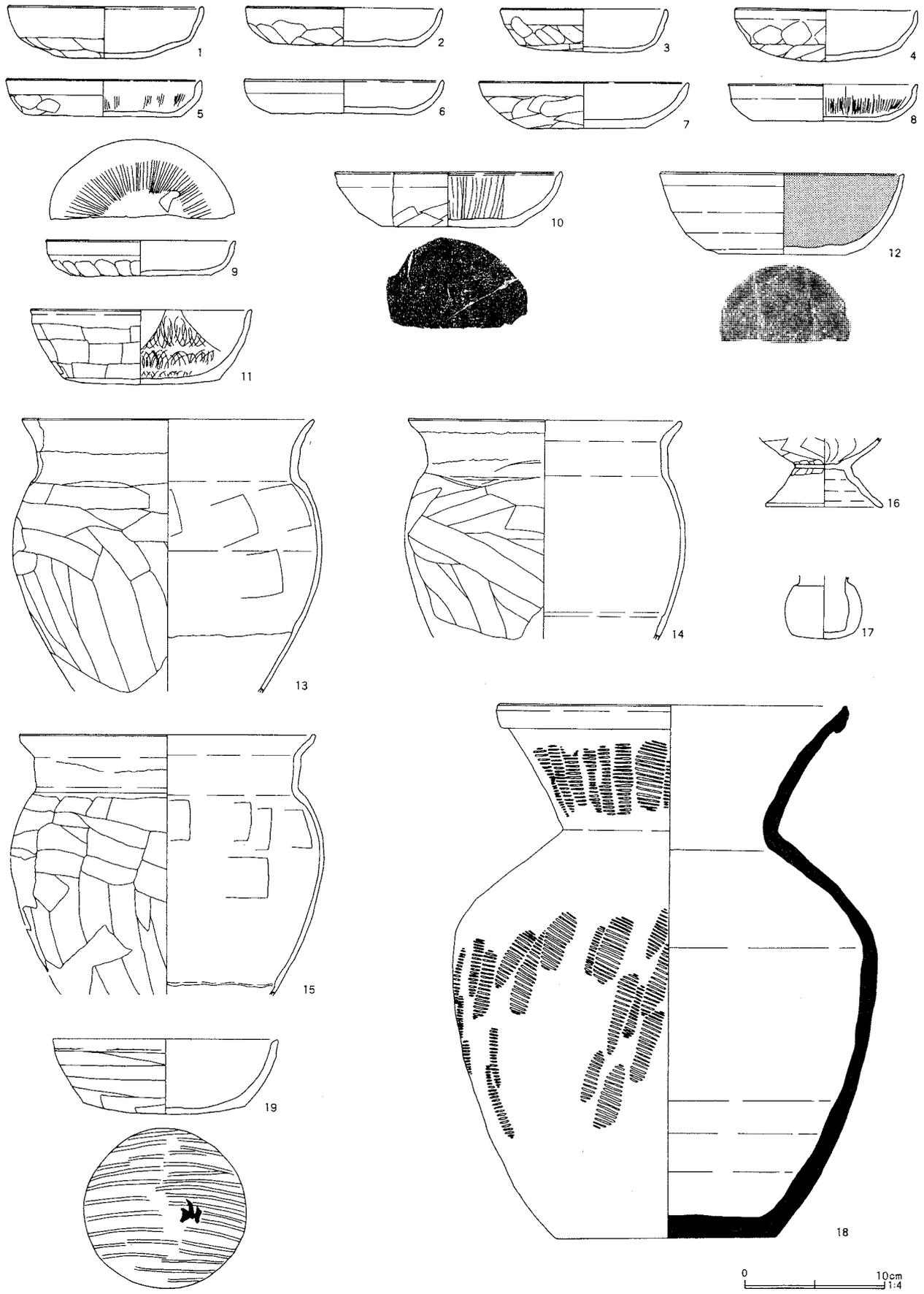
- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 1 黒色土(焼土ブロック混じり) | 9 褐色土(焼土ブロック多量に含む) |
| 1' 黒色土(焼土ブロック混じり、炭化材の混入多) | 10 黒色土(焼土ブロック含む) |
| 2 黒褐色土(焼土ブロック含む、最下面に薄い黒色帯あり) | 11 黒褐色土(柔らかい層、焼土ブロック含む) |
| 3 灰褐色土(粘土質、黒褐色土が輪状に入る) | 12 灰褐色土(黄色みを帯びる) |
| 4 灰白色土(黒褐色土が塊状に入る) | 13 黒褐色土(粘性が強い) |
| 5 灰白色土(純層に近い) | 14 黄褐色粘土(崩落した天井) |
| 6 灰青色土(床面を覆う土) | 15 焼土層(一部褐色土混じり) |
| 7 茶褐色土(しまりの強い土、焼土ブロック多量に含む) | 16 黒色土(焼土ブロック混じり) |
| 8 黒褐色土(焼土ブロック、黄色粘土ブロック含む) | |

0 2m 1:80

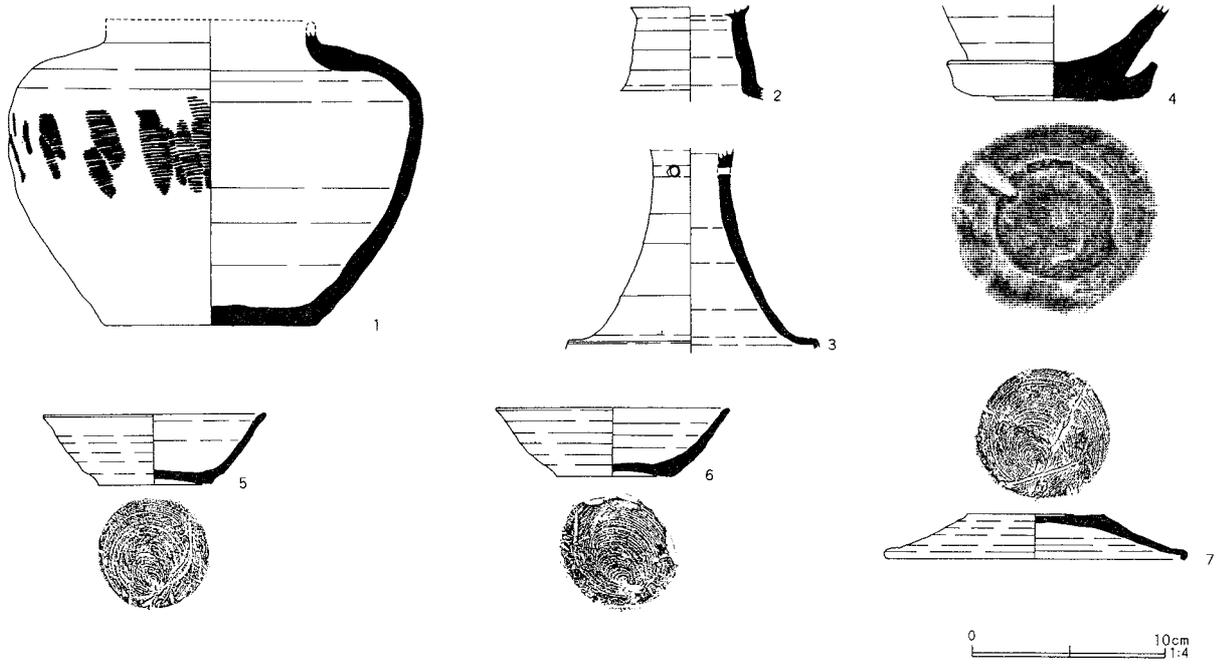
第6図 第2号・第3号住居跡全測図



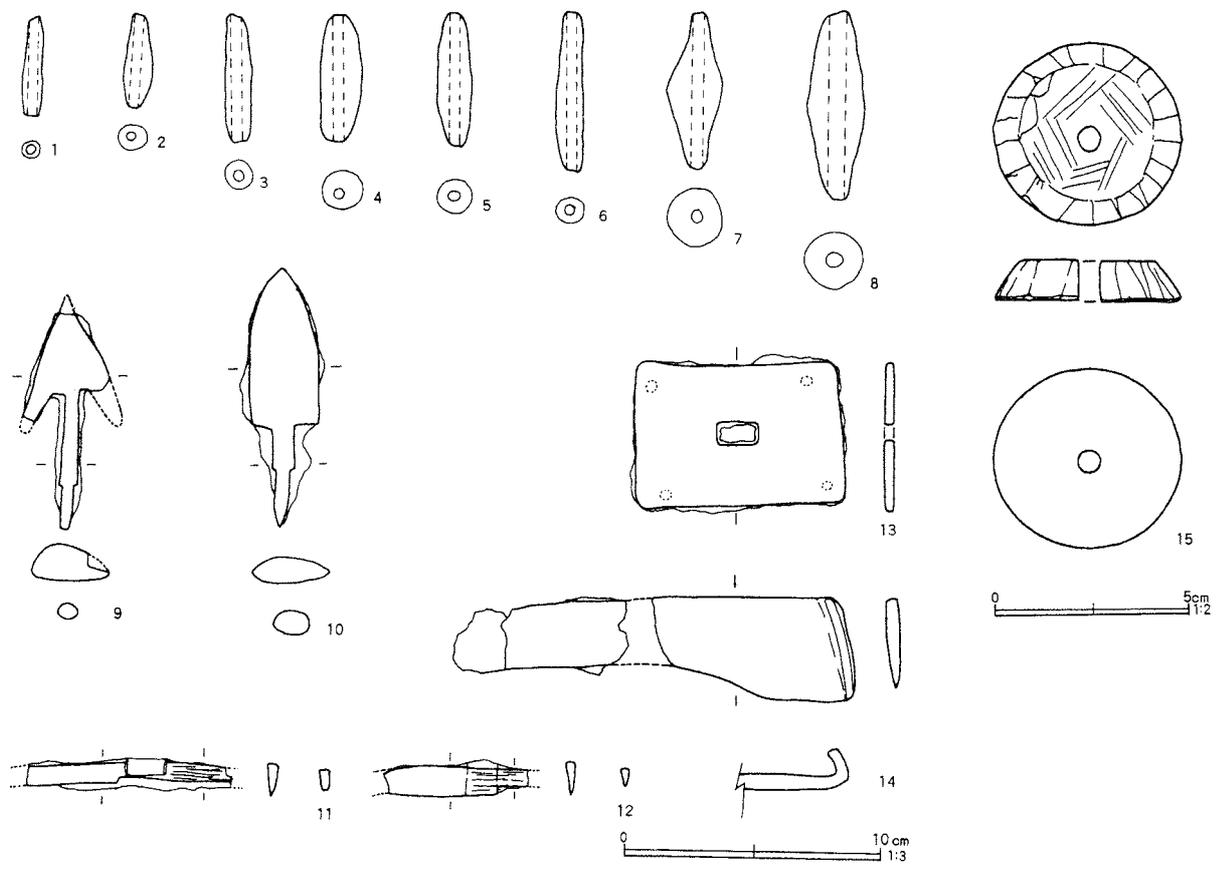
第7図 第2号住居跡出土遺物 (1)



第8図 第2号住居跡出土遺物(2)



第9图 第2号住居跡出土遺物 (3)



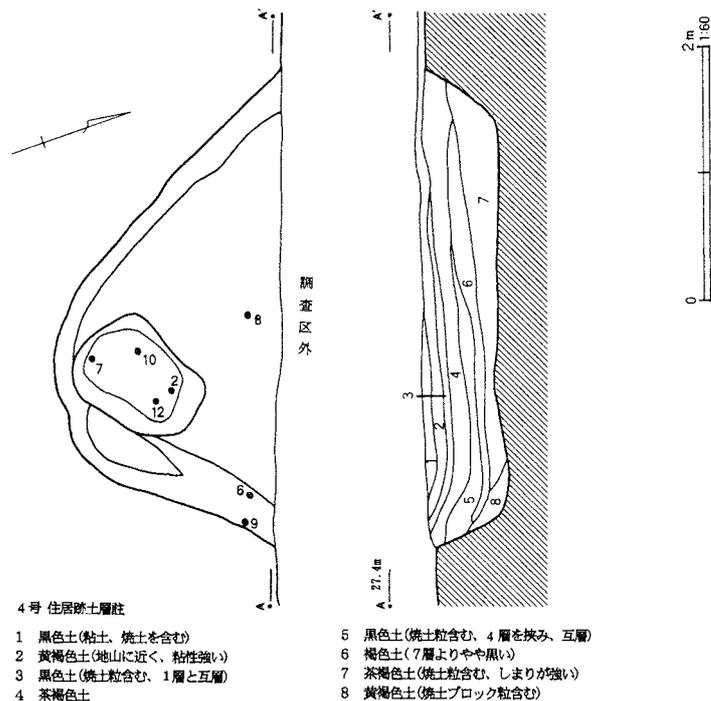
第10图 第2号住居跡出土遺物 (4)

第4号住居跡

<位置と規模> 調査区の北側壁面に位置している。

<形態と規模> 西辺3.5m、南辺1.8mを検出したのみで他は調査区外となる。カマドは検出できなかった。深さは確認面から50cm程度である。南コーナーには貯蔵穴風のピットがある。

<遺物の出土状況> 覆土は黒色土と茶褐色土の互層であり、第2号住居跡とよく似ていた。覆土上半は土師器、須恵器の小破片がほとんどで、図示したものは床面近くからまとまって出土したものである。土師器坏がまとまっており、赤みのある坏のほか、器形の異なる灰褐色で、分厚い坏も多く出土した。住居跡の時期は「コ」の字甕に近いものがあるが、須恵器坏は扁平なものであり、第2号住居跡に近い時期が想定される。



第11図 第4号住居跡全測図

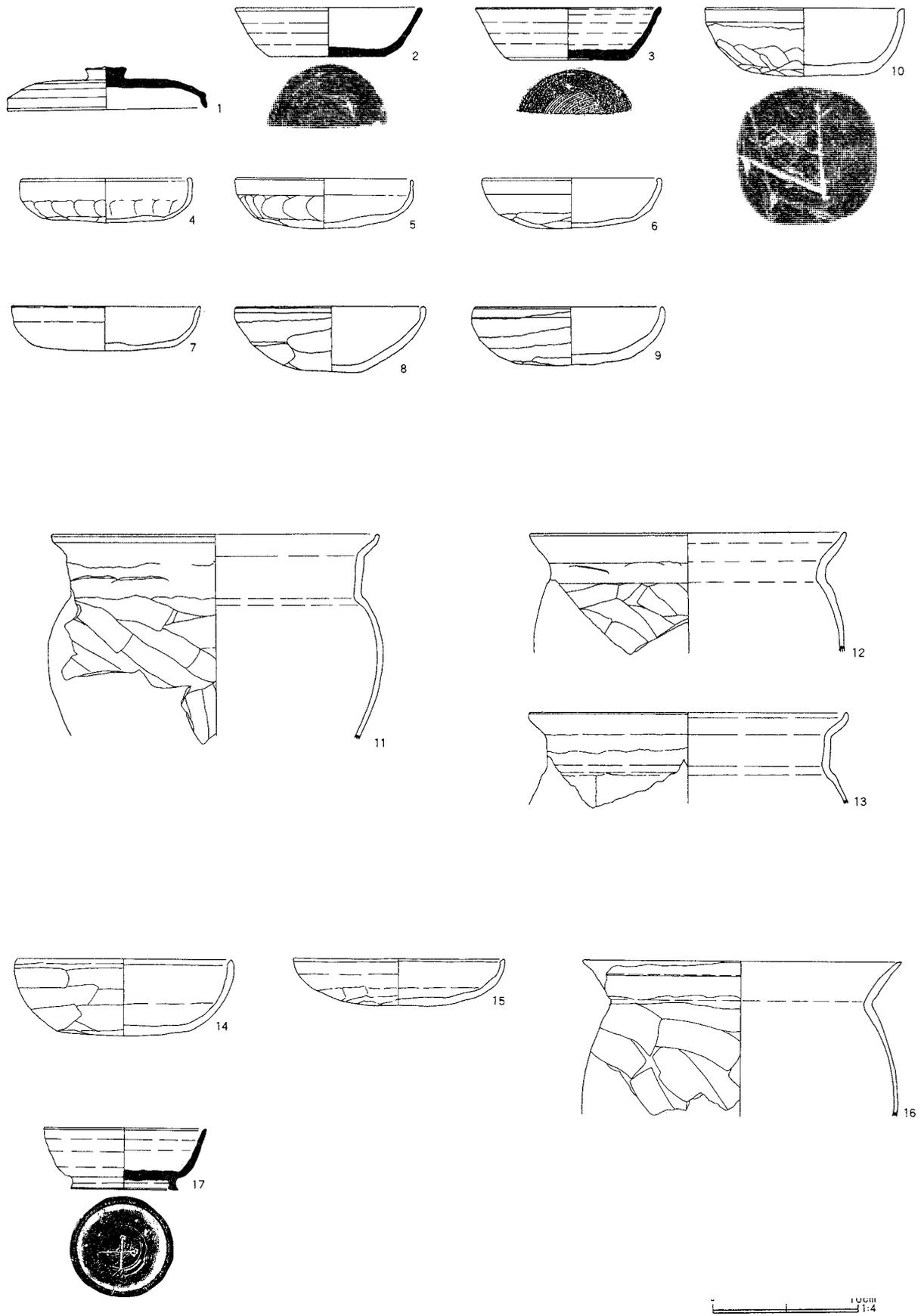
その他の遺構

第2号住居跡の北壁で第5・6号の2軒の住居跡、同じく第2号住居跡北東隅の覆土でカマドが検出され、第3号住居跡が発見された。また、第2号住居跡の西コーナーに接して第7号住居跡が検出された。

第2号住居跡内に造られた小形の第3号住居跡はカマド周辺の確認のみで、南半の範囲が確認できなかった。カマドが覆土内に見られたことから新しい。時期は第2号住居跡出土遺物の最後に図示した須恵器坏などから9世紀第4四半期が想定される。この坏は南比企、末野の両窯跡群ではなく、群馬県産の可能性が高い。

第5・6号住居跡は遺構確認時2か所カマドがある1軒の住居跡と想定したが、掘り進めるうちに、2軒であることが判明した。第5・6号住居跡の床面精査中第2号住居跡が切っており、両住居跡が古いことが判明した。出土遺物は北側の第5号住居跡の北コーナー付近の床面からまとまって出土した。土師器甕の大形破片(第12図16)もあり、第2号住居跡より古いことを裏付けている。

第7号住居跡はカマドおよび掘り方のみ検出されたものである。床面と想定される場所で、須恵器高台付き坏が出土した。南比企産であろう。9世紀第2四半期が想定される。(谷井彪)



第12図 第4号(1~13)、第5号(14~16)、第7号(17)住居跡出土遺物

まとめ

立地

妻沼町は東西に流れる利根川に接した地であり、妻沼低地と呼ばれる。しかし、子細にみると、北半には利根川の複雑に蛇行した流路跡や本庄市、岡部市境から流れてくる福川の複雑に蛇行した流路跡、妻沼町の南に接して、熊谷市を中心に広がる荒川扇状地がある。

鶉の森遺跡は南に入胎川が流れる自然堤防状の微高地にあり、その南には荒川扇状地が広がる。遺跡の周辺地域の地形を迅速図で検討してみると、妻沼町の北半では利根川、南半では福川の複雑な蛇行した流路が復元できる。遺跡の南に流れる入胎川は福川の旧流路の一つであろう。

遺跡周辺の地形は一見、東西に長い独立丘に見えるが、微高地状の地形は、さらに東側へ広がり、西城館や長安寺北遺跡が列なり、北側へは現福川を挟んで、旧上須戸村の集落へとつながっていく広大な平坦地へととなっている。このように地形を復元してみると、遺跡はこの平坦地の南西に広がる集落と考えられよう。

住居跡の分布

鶉の森遺跡、入胎遺跡は、昭和49年の発掘調査で、現万有製菓(株)の敷地の東西660m強全体を調査し、大まかな全体像は明らかになっている。調査地内では西側が鶉の森遺跡、東側が入胎遺跡と分けられていた。

集落のまとまりは2グループに分れ、両者の間は160mほど開いているが、時期的に大きな隔たりがないことから空白区域は地形的に窪んでいるなどの地形的要因で切れているように見えるのかもしれない。

今回の調査区は西側の鶉の森遺跡の北に当たる。調査区はほぼ平坦であり、発見された住居跡の密度から考えて連続した広がりと考えられ、集落も北限がつかめたわけではない。

出土遺物

今回の調査では、大形住居跡である第2号住居跡からのものが過半を占める。大量の土師器、須恵器のほか、墨書の須恵器、土錘、鎌、刀子、鉄族のほか、扉の鍵穴などの鉄製品、また、カマド内の覆土であるが、紡錘車の出土もあった。

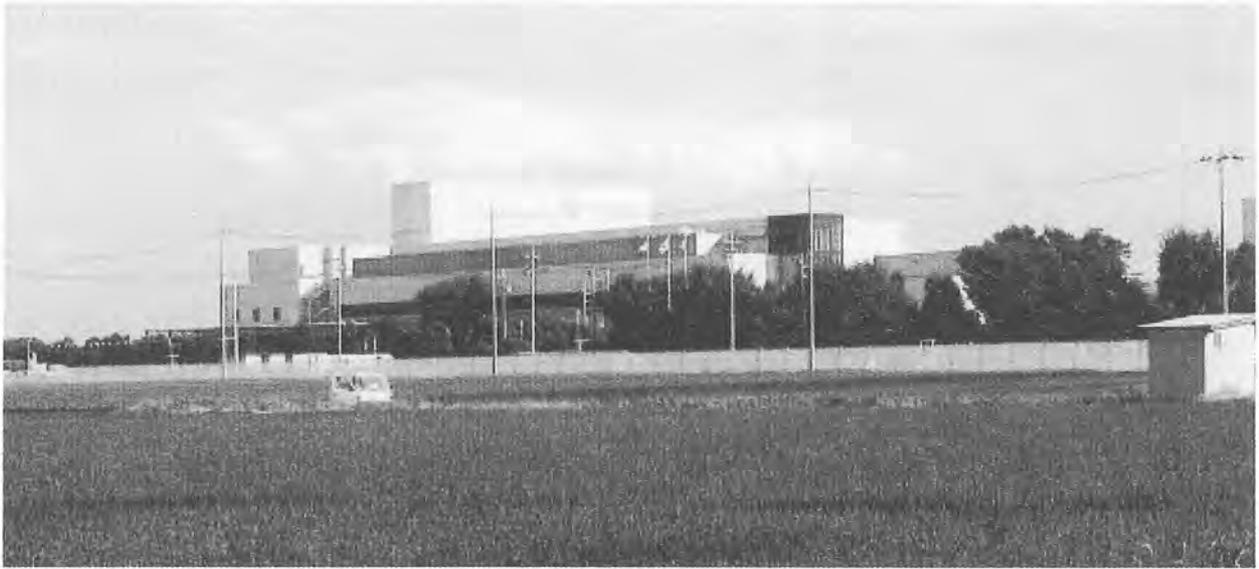
土師器では、暗文の土器には、3種類あり、連続ループを描く胎土の白いもの、口縁端部に沈線が引かれたいわゆる比企型坏と同じ手法見られ、さらに白い化粧粘土の塗られたもと、在地の坏に暗文のあるものがある。いずれにしても搬入品が入っていることになる。

須恵器では大半が南比企産であったが、一部胎土が白っぽく、吸水性のよい、きめの細かな粘土を持つ一群土器がある。栃木県産のものでないかとの示唆があった。このタイプには2種類あり、体部が直線的で短い、底部全面へら削りのものと底部から体部にかけて湾曲しながら開く、体部に長い、底部意図切りっぱなしのものがある。胎土には違いがあり、やや柔らかな焼き上がりである。南比企などで考えると大きな時間差があることになるが、複数個体の出土であることから同時期の可能性があり、今後の検討課題である。

なお、第3号住居跡の須恵器には胎土に黒い粒子が含まれる。県外産の可能性が高い。

遺跡の性格

今回10mを越す大形住居跡が検出された。また、須恵器、土師器とも搬入品がみられた。鉄製品では掘っ立て建物跡の鍵穴、僅かであるが墨書土器の存在など、以前の調査で発見された多数の住居跡などから本遺跡はこの地域の中心的な村落で、いずれ掘っ立て柱建物跡などの倉庫群と組になった景観が予想される。その意味で利根川から分流する福川の最初の拠点集落といえよう。(谷井彪)



鶉ノ森遺跡と周辺を望む



調査区全景(東から)



作業状況



第1号住居跡東西土層



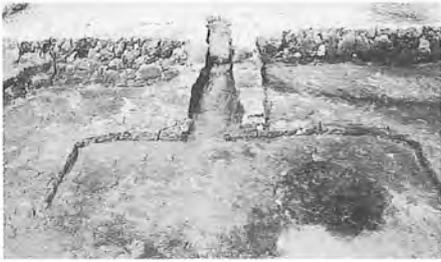
第1号住居跡



第2号住居跡東西土層



第2号住居跡須恵器甕出土状況



第3号住居跡



第2号住居跡カマド紡鍾車



第2・第7号住居跡(西から)



第2号住居跡出土状況



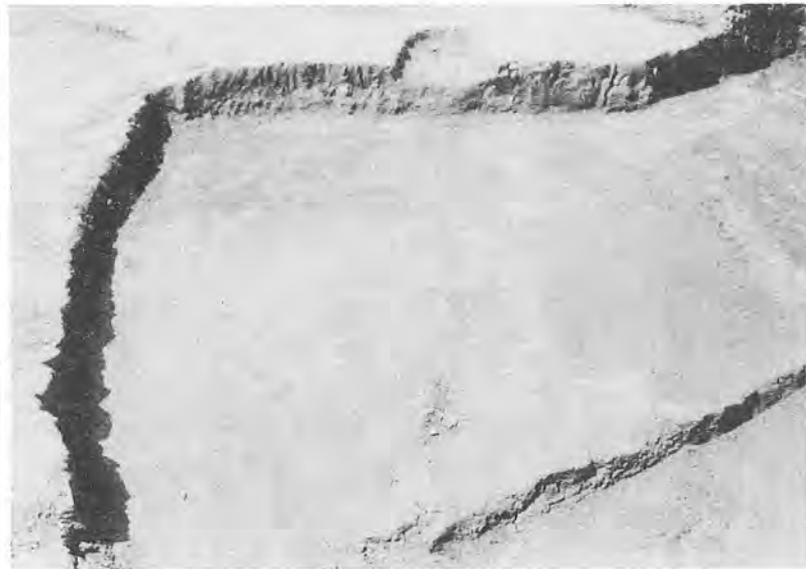
第4号住居跡



第2号住居跡出土状況



第4号住居跡出土状況



第6号住居跡



第5号住居跡出土状況



第2号住居跡須恵器甕 第8図-18



第2号住居跡土師器甕 第8図-15



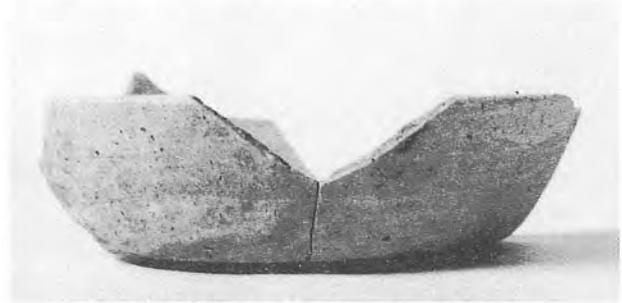
第2号住居跡須恵器広口壺 第9図-1



第2号住居跡須恵器こね鉢 第8図-4



第2号住居跡須恵器蓋 第7図-1



第2号住居跡須恵器坏 第7図-25



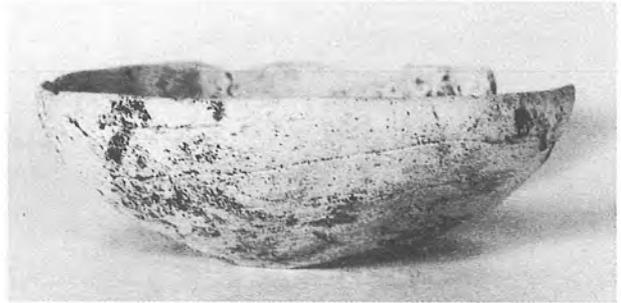
第2号住居跡須恵器坏 第7図-28



第2号住居跡須恵器坏 第7図-30



第3号住居跡須恵器坏 第9図-5



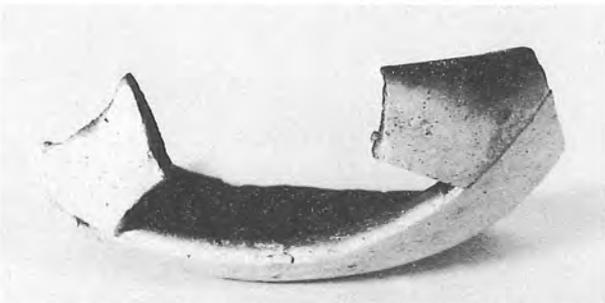
第4号住居跡土師器坏 第12図-8



第2号住居跡土師器坏 第8図-5



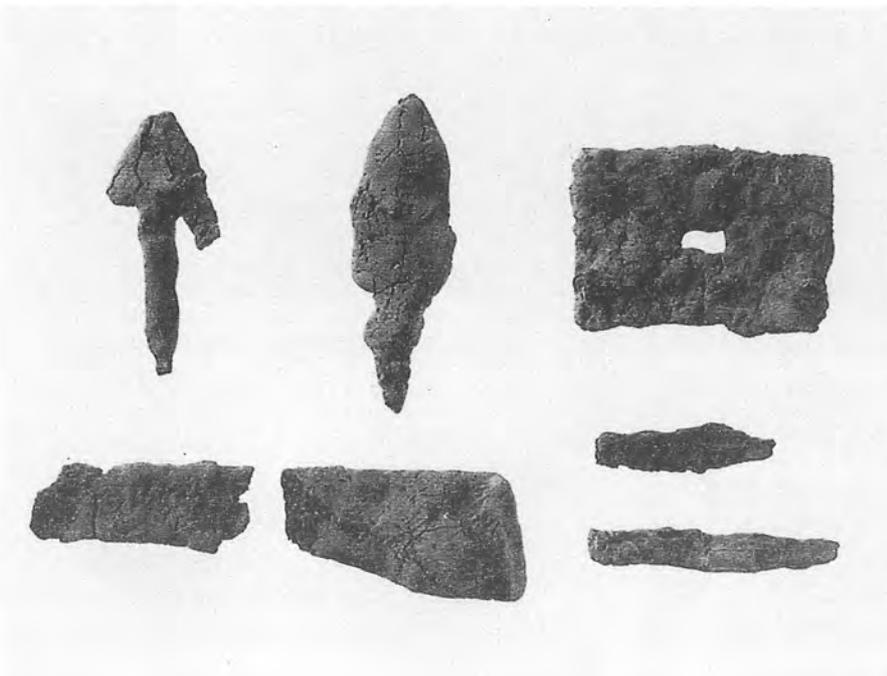
第2号住居跡土師器坏 第8図-19



第2号住居跡土師器坏 第8図-12



第2号住居跡土師器坏底部 第8図-19



第2号住居跡鉄製品 第10図



紡錘車(上) 土錘(下)

報 告 書 抄 録

フリガナ	ウノモリイセキ							
書名	鵜ノ森遺跡 2005年発掘調査の概要							
副書名								
シリーズ								
巻次								
編著者	谷井 彪							
編集機関	妻沼町遺跡調査会							
所在地	〒360-0292 埼玉県大里郡妻沼町大字弥藤吾2450 TEL 048-588-1321							
発行日	平成17年9月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ウノモリイセキ 鵜ノ森遺跡	妻沼町 西条字 鵜ノ森	11403	018	36度 12分 24秒	139度 23分 27秒	2005.6.24) 7.29	432m ²	工場建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
鵜ノ森遺跡	集落	奈良・平安時代		住居跡・土壇		土師器、須恵器、鉄製品、土錘		